

サウンド・デザイン演習 2017

まとめ



VERTIGO

(ミニマル風で使用した映像素材について)

アルフレッド・ヒッチコック (監督) 『めまい』 (1958年公開) のオープニング映像

主演: ジェームス・スチュワート, キム・ノヴァック

音楽: バーナード・ハーマン

(ミニマル風で使用した映像素材について)

- ・ オープニング 「映像の制作」 は、グラフィック・デザインで著名な
ソール・バス Saul Bass (1920 - 1996 , アメリカ)

1950年代~1970年代まで 多くの映画のオープニング映像を担当

<https://note.mu/cue/n/n69fc1debec66>

- ・ 有名なコーポレーションアイデンティティ(C.I.)を多数デザインした
日本でも、味の素、京王百貨店、コーセー化粧品、紀文食品 など多数

ソール・バス Saul Bass (1920 - 1996, アメリカ, グラフィック・デザイナー)



ソール・バス制作 「コーポレート・アイデンティティ」の一部



<http://flexbrandingdesign.com/2011/12/14/saul-bass-design-icon/>



<https://www.kose.co.jp/>



<http://www.kibun.co.jp/>



<http://www.vitbbs.cn/a/LOGOdaquan/2011/0328/18532.html>



<https://www.pinterest.com/pin/28921622584035590/>



「 弊社は企業の若々しさや信頼性を表現できる「ブルー」と「ハト」をモチーフに、アメリカ人デザイナー、ソールバスに包装紙のデザインを依頼しました。商業デザイン、企業CIなどの分野で活躍したバスは、とりわけ映画のタイトルデザインの第一人者として知られます。「私はその中に、楽しさ、生命の祝福、それと同時に澄んだ静けさを表現しようと努めました」とバスが語るハトが連なって飛ぶデザインは、〔彼の作った映画オープニング映像の〕「黄金の腕」「悲しみよ こんにちは」「グラン・プリ」などに見られるモチーフの連続にも通じています。これにより、バスはアメリカの由緒あるデザインコンクールで最優秀作品賞を受賞しました。」



(ミニマル風で使用した映像素材について)

- CG の実制作は、1960年代からの 「コンピュータアート」 の草分け
ジョン・ホイットニー・シニア John Whitney Sr. (1917 – 1995)

「 1950年代から1960年代にかけて、コンピュータアートとビデオアートが相前後して展開を開始する。現在のメディアアートの直接のルーツは、ほぼ同時期に発展してゆくことになる この2つのジャンルにある と考えることができる 」

白井雅人ら『メディアアートの教科書』 フィルムアート社、2008年、12～13頁。

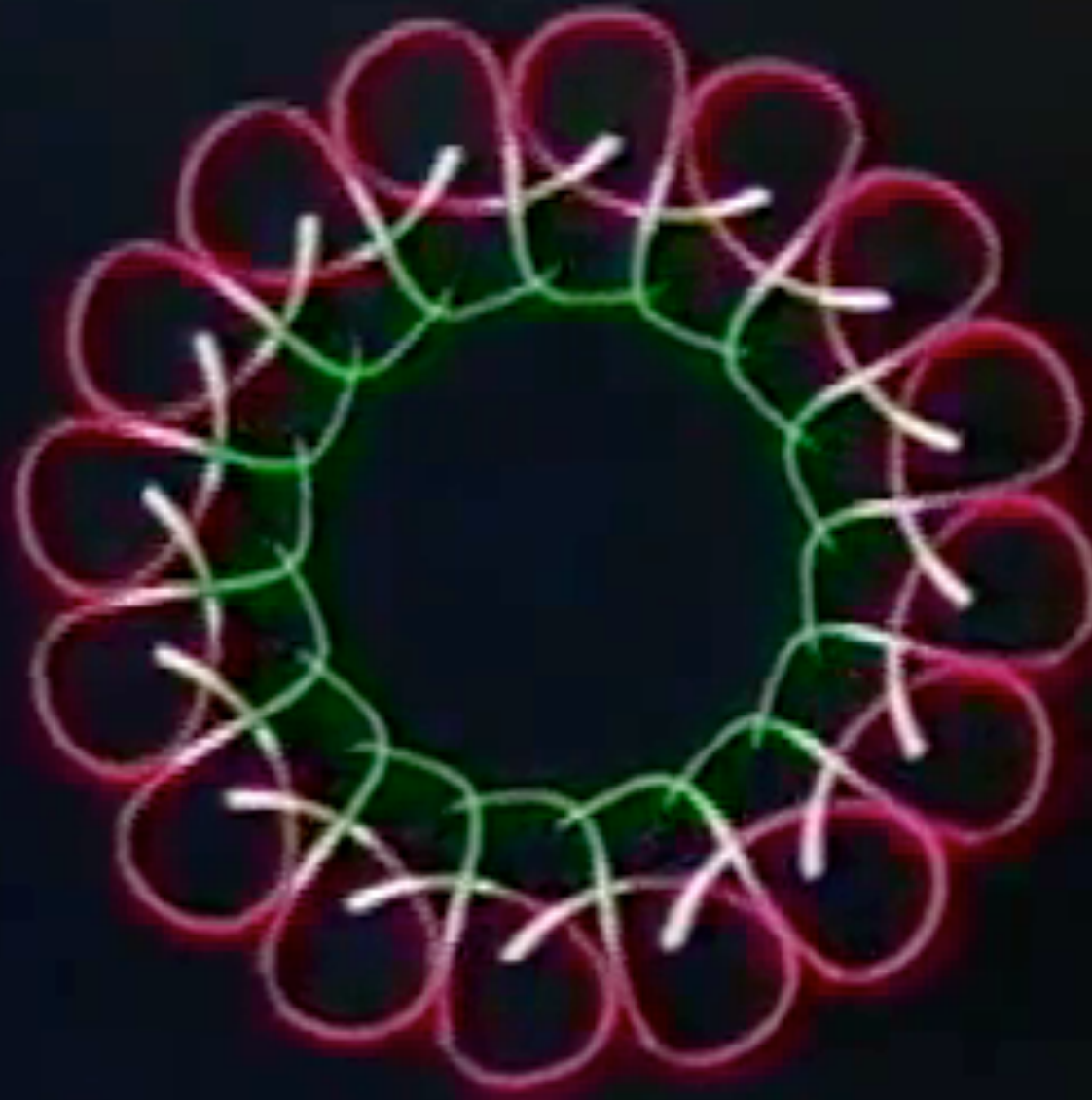
代表作の例

【youtube】 John Whitney "Catalog" 1961

<https://www.youtube.com/watch?v=TbV7loKp69s>

John Whitney “Catalog” (1961)

(7分22秒)



1937～38年まで、ジョン・ホイットニーは、パリで 12音技法の作曲を学んだ経験がある
(wikipedia “Johon Whitney (animator)” より)。

〈コンピューターアート〉の代表作品
電圧制御の計算機とブラウン管モニター

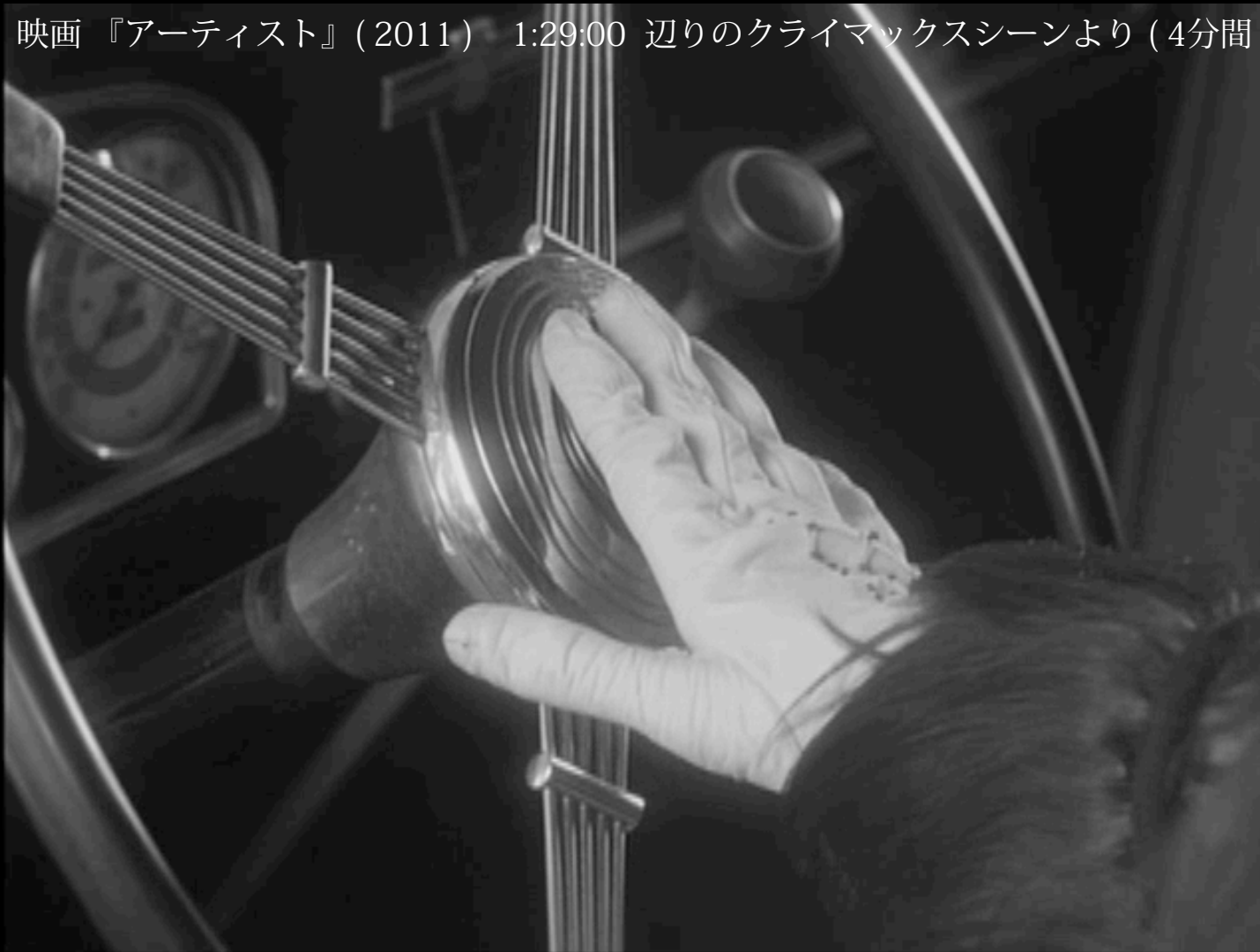
<https://www.youtube.com/watch?v=TbV7loKp69s>

映画音楽の名曲 『めまい』 から「愛の情景」 Scene d'amour (1958)

音楽：バーナード・ハーマン Bernard Herrmann



映画『アーティスト』(2011) 1:29:00 辺りのクライマックスシーンより(4分間)



今日の映画でも『めまい』(1958)の映画音楽「愛の情景」がオマージュとして使用されている。さらに、映像面でもまた、車を運転する女性を前方から写すショットは、ヒッチコック監督の特徴的な画面作りへのオマージュと考えられる(『サイコ』(1960)や『汚名』(1946)など)。

まとめ

音楽を映像と共に考える意義

～ なぜ音楽と美術を区別すべきではないか？ 西欧近代批判の視点から

啓蒙思想の特徴 : 西欧「近代主義」の特徴

- **西欧中心主義** eurocentrism
西洋こそが世界で最も進んだ文明であるという考え
- **要素還元主義** reductionism
物事の本質をさぐるには、本質以外の余計な要素を極力排除すべしとする考え
- **進歩主義** progressivism
新しいことは常に良いとする考え
- **人間中心主義** anthropocentrism / humanism
たとえば、人間を 自然環境・生物 など 万物の中心とする考え
- **機械論** mechanism
人間は科学によって自然を制御することができるとする

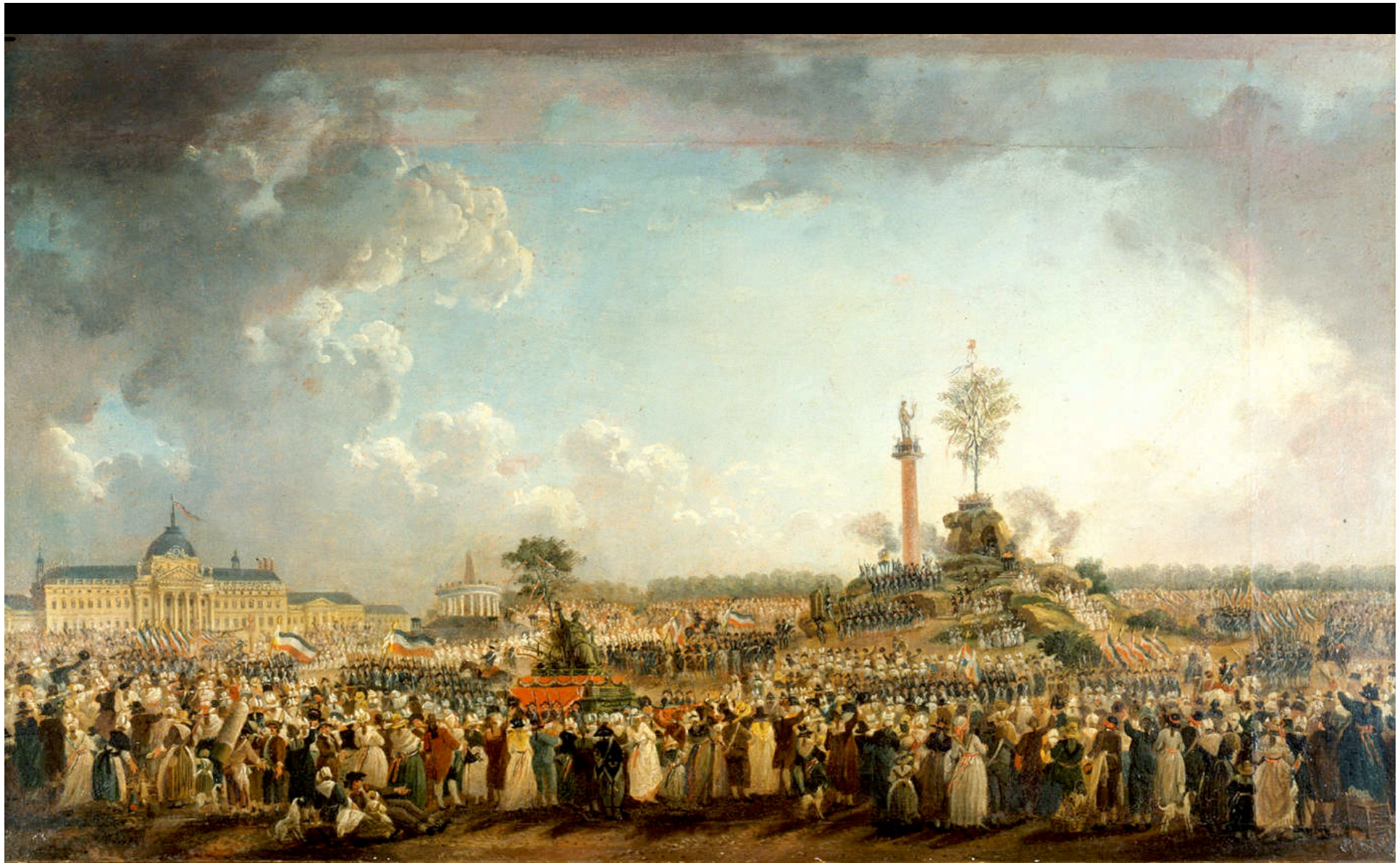
「今日われわれが普通に使用している『芸術』という概念は
もともと西洋の近代社会において成立した概念である」

[村田誠一 : 242]

近代藝術： 神に代わる存在

「人間が世界の主人となるということは
人間がみずから神に代わる存在となることを意味する」 [松宮：80]

「『芸術家』とは理念的にはみずから神となって、自己の作品を通じて、
歴史と社会がいまだ発見しえなかった新しい価値を創出する
『創造者』となることである」 [松宮：67]



フランス「最高存在の祭典」(人為的につくられた理性的宗教)
Festival of the Cult of the Supreme Being, 1794

祭典の演出は画家のジャック＝ルイ・ダヴィッド

「自律美学」から 美学的「形式主義」へ

表現における美的自律性と人間的感情の排除

自律化する〈近代藝術〉

- ・「西洋の近代藝術 を規定している根本動向は
自律化・純粹化の運動である」と言われる」[国安：30]

自律化する〈近代藝術〉

- ・ じりつ【自律】
 - 自分で自分の行為を規制すること。外部からの制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動すること。[広辞苑]
- ・ 「自律化・純粹化」を目指すとは、**芸術が芸術の外の諸規定から自由となり、自分自身で成り立つ自立した存在となること。**
- ・ 〈唯一絶対の真理の本質〉を より純粹な形で呈示しようとする

クレメント・グリーンバーグ Clement Greenberg

(1909-1994, アメリカの美術批評家)

「平面性、二次元性は、絵画が他の芸術と
分かち持っていない唯一の条件であった」

(グリーンバーグ「モダニズムの絵画」より)



画像 : <http://jonfinearts.com/ModernismEssay2.html>

クレメント・グリーンバーグ Clement Greenberg

(1909-1994, アメリカの美術批評家)

絵画は、その固有の形式的要素「平面性」を自己批判的に追求すべし。



「メディアウム・スペシフィシティ」

Medium Specificity ※媒体特性

「素材や媒体に固有の性質のことを示す美学／批評用語。
モダニズムの美術批評の理論的展開において重視され、
特に批評家、C・グリーンバーグの言説によって広まった」

(Web『アートワード, 現代美術用語辞典 ver.2.0』より)



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 1948年
ニューヨーク近代美術館 (MOMA) 撮影: T.Ishii



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 (1948) @ MOMA



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 (1948) @ MOMA



バーネット・ニューマン 《崇高にして英雄的なる人》 1950-51年 (242.9 × 542.0 cm)

「抽象表現主義」 > 「カラーフィールド・ペインティング」 ('50s頃) の例



ジュールズ・オリツキー
“END RUN “ (1967)



ジュールズ・オリツキー
“BEAUTY MOUTH-TWENTY FOUR “ (1972)

※ グリーンバーグからの評価が高かった作家

自律美学的、形式主義的「近代藝術」の帰趨

モダンアートの帰結（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨

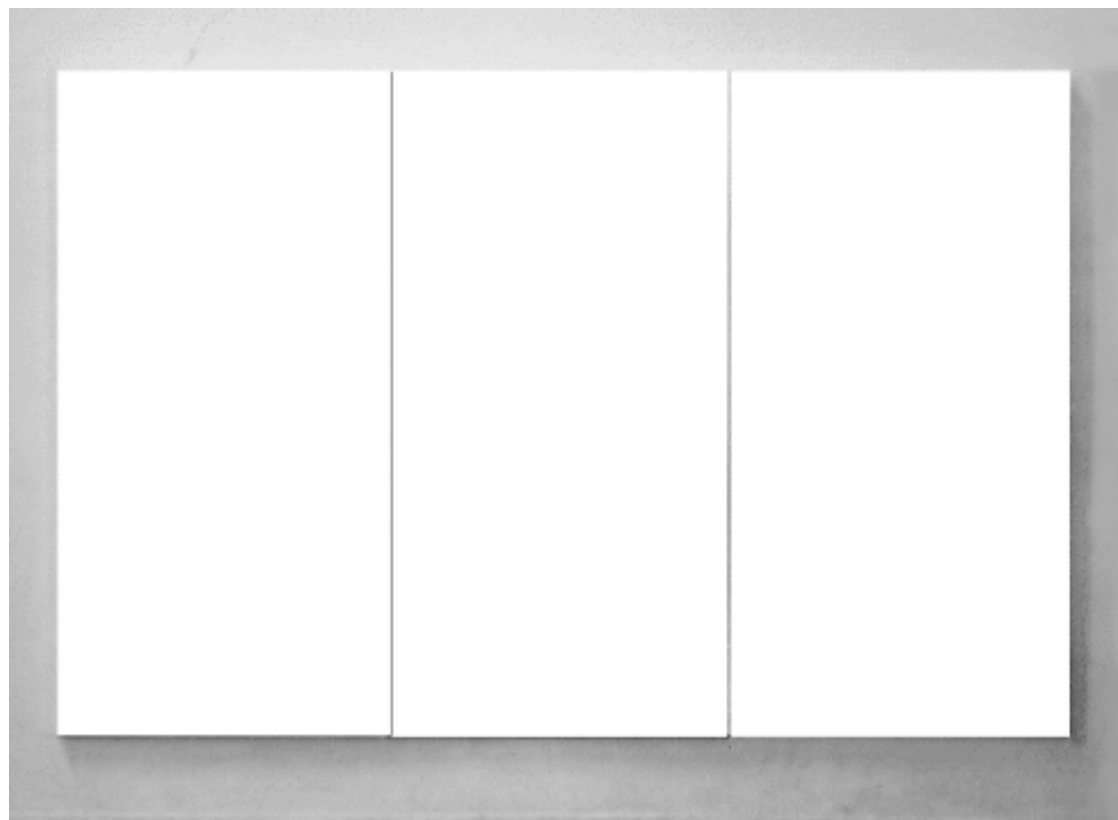


ロバート・ラウシェンバーグ
『白い絵画』1951

<http://canonpluscanon.wordpress.com/2010/03/09/robert-rauschenberg-white-paintings/>

モダンアートの帰結（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨



ロバート・ラウシェンバーグ
『白い絵画』1951

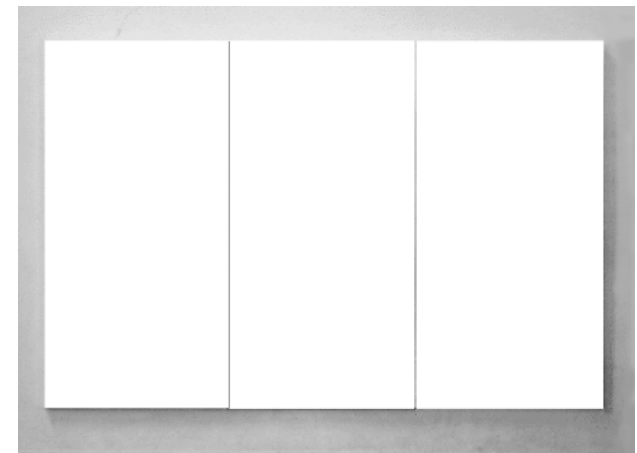
<http://monicadmurgia.com/tag/robert-rauschenberg/>

モダンアートの帰結（絵画篇）

「私に **4分33秒** の作曲させたのは、
無響室での体験と、
ロバート・ラウシェンバーグの
“white painting” だった」

ジョン・ケージ 『自叙伝』 (1989) より

http://johncage.org/autobiographical_statement.html



モダンアートの帰結（音楽篇）



ジョン・ケージ『4分33秒』(1952)

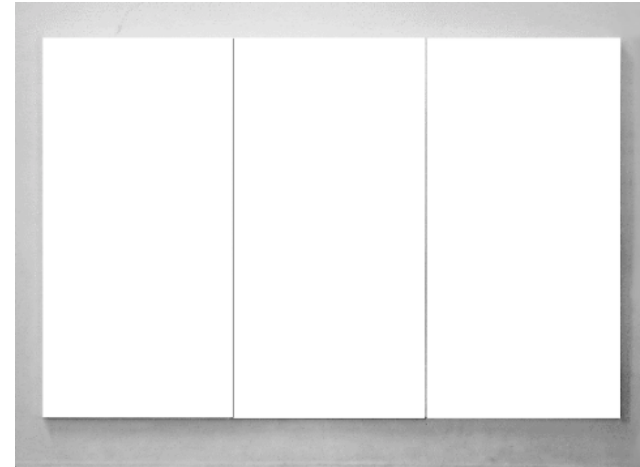
<https://www.youtube.com/watch?v=qWuNVByFVTY>

(※ いわば 純化の極地)

- ・ 3楽章形式
- ・ 第1楽章を33秒、第2楽章を2分40秒、第3楽章を1分20秒
- ・ 楽章間に休みがある
- ・ 合計時間4分33秒で〈演奏〉する

モダンアートの帰結（音楽篇）

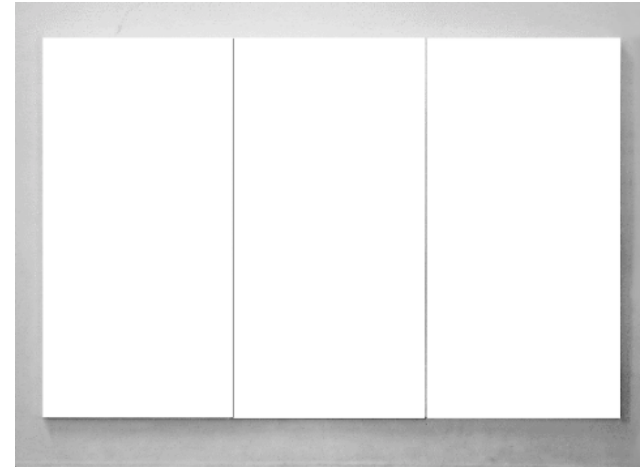
3
近代芸術の
帰趨



〈啓蒙思想〉に導かれた
〈要素還元主義〉、〈進歩主義〉を、究極に、突き詰めた結果、
音楽に音が無くなり、絵画には色と形が無くなった。

モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨



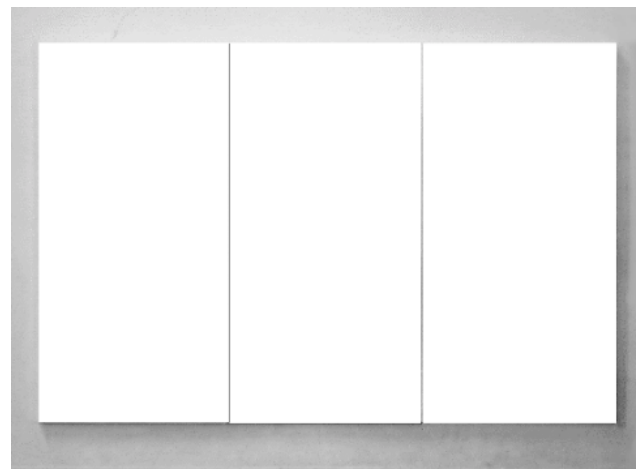
音楽に音が無く、絵画には色と形が無い。

したがって、これ以上の〈進歩〉は見込めなくなった。

しかしそれは〈近代芸術〉〔モダンアート〕の必然的な着地点であった。

モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨

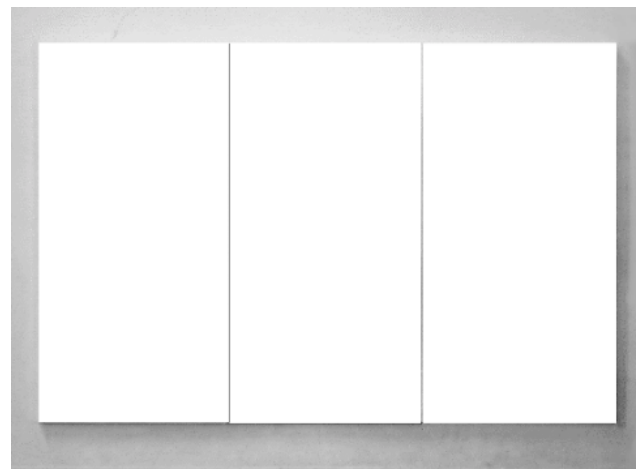


ニヒリズムとは「最高の価値が無価値になるということである」

～フリードリヒ・ニーチェ『道徳の系譜』

モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨



さて、このような〈近代〉の限界を前にして、
〈現代〉のわれわれはどうする？

啓蒙思想の特徴 = 近代藝術 の特徴 = 現代アート の方向性のヒント

- **西洋中心主義**

西欧のあり方を普遍的なものとする考え。 また男性中心主義にもつながる。

- **要素還元主義**

分類し、可能な限り細部に切り分けることで、物事の〈本質〉をすることが出来るとする考え

芸術の「本質」をさぐるために、他の表現要素にたよらない〈自律的な芸術〉への志向にも。

- **進歩主義**

新しいものは良く、古いものは良くないとする考え。

われわれは、〈真理〉に到達する歴史上の過程にいるという考え。

- **人間中心主義**

人間の理性によって自然を制御して〈真理〉に到達しようとする考え

※ 「物語映像」の中の音楽の可能性

- 西欧近代的〈藝術〉音楽を批判的に乗り越えるための映像音楽
 - 音楽、美術、文学、、、などの区分の近代的性格を相対視する
 - いわば〈ギリシャ悲劇的メディア〉としての「物語映像」
 - 音楽が生まれる自然な誘因をとりもどすこと
(還元・純化・極度の自律化から、自然な文脈の中に音楽を再定位)
 - 音楽の自律性と映像(等)の自律性との均衡を探ること
やはり不可避な自律性はある。関係性の中での価値創出
 - 「物語映像」をとおした自然の〈模倣〉、自然への敬意としての音楽
※ 脱・近代的人間中心主義。ジャン=ジャック・ルソー〈音楽模倣論〉の可能性の現代的再考。

「さしあたりは、われわれ人間が自然の一部でもあることを
認識することであり、ひいては、人間以上に偉大なものが存在
することをわきまえることです。それが美学と結びつくのは、
美がそのようなものだからです」

以上、おつかれさまでした

主な参考文献・さらなる知識のために

石井宏 (2004) 『反音楽史：さらばベートーヴェン』 新潮社。

岡田暁生 (2005) 『西洋音楽史：「クラシック」の黄昏』 中公新書。

神林恒道 (1996) 『シェリングとその時代：ロマン主義美学の研究』 行路社。

高辻知義ら (1997) 『ヨーロッパ・ロマン主義を読み直す』 岩波書店。

松宮秀治 (2008) 『芸術崇拜の思想』 白水社。

三浦信一郎 (1999) 「ベートーヴェン神話の形成と支配：音楽における近代」、神林恒道ら編『芸術における近代』 ミネルヴァ書房。

吉田寛 (2002) 「E・T・A・ホフマンの音楽美学にみる歴史哲学的思考：器楽の美学はいかにして進歩的歴史観と結びついたのか」 『美学芸術学研究』 20、東京大学大学院人文社会科学研究科。

E・T・A・ホフマン (1810=1984) 「ベートーヴェン・第五交響曲」 鈴木潔訳 『無限への憧憬：ドイツ・ロマン派の思想と芸術』 国書刊行会。

E・バーク (1757 = 1999) 『崇高と美の観念の起源』 中野好之訳、みすず書房。

小田部胤久 (2009) 『西洋美学史』 東京大学出版会。

熊野純彦 (2006) 『西洋哲学史：近代から現代へ』 岩波新書。

村田誠一 (1999) 「近代の終焉? : 芸術的表現の可能性と限界」、神林恒道ら編『芸術における近代』
ミネルヴァ書房。

ヴィンケルマン (1755 = 1976) 『ギリシア美術模倣論』 澤柳大五郎訳、座右宝刊行会。

バトラー (1747 = 1984) 『芸術論』 山縣熙訳、近代美学双書。

国安洋 (1991) 『〈藝術〉の終焉』 春秋社

エドゥアルト・ハンスリック (1854=1960) 『音楽美論』 渡辺護訳、岩波文庫 青503-1。

カント (1790 = 1964) 『判断力批判 (上・下) 』 篠田秀雄訳、岩波文庫。

クレメント・グリーンバーグ (2005) 『グリーンバーグ批評選集』 藤枝晃弘訳、勁草書房。

佐々木健一 (1995) 「かたち」 『美学辞典』 東京大学出版会。

菅原教夫 (1992) 『やさしい美術：モダンとポストモダン』 読売新聞社。

三浦信一郎 (1999) 「ベートーヴェン神話の形成と支配：音楽における近代」、神林恒道ら
編 『芸術における近代』 ミネルヴァ書房。

沼野雄司 (2005) 『リゲティ、ベリオ、ブーレーズ』 音楽之友社。